

「やまかいどう」は埋蔵文化財センター建設時に発掘調査を行った敷地内の「山海道遺跡」にちなんで命名されました。

栃木県埋蔵文化財センターだより

やまかいどう



とちぎテレビ番組「とちぎ教育新事情」取材風景(市之塚遺跡における二宮町の中学校2年生によるマイ・チャレンジ)

特集 旧石器時代の衣食住

発掘現場の
最新情報!
発掘現場レポート

埴輪復元

施設紹介『那須野が原博物館』開館へ向けて
とちぎテレビ「古代の文化にふれよう」
研修生紹介「杭州歴史博物館 方 憶 文博館員」

No.
35
2004.1

特集

旧石器時

旧石器時代とは今から約1万3千年以上前の時代で、前期旧石器時代(約250万年前～約15万年前)、中期旧石器時代(約15万年前～約3万5千年前)、後期旧石器時代(約3万5千年前～約1万3千年前)の3時代に区分されます。

- 土器作りが始まる
- 弓矢を使っての狩りが始まる

■ 約13000年前

旧石器時代 (前 期)

かみばやし
上林遺跡
(佐野市)
とばしんでんぱうきね
鳥羽新田篠根
神社遺跡
(塙谷町)
たこうみなみはら
多功南原遺跡
(上三川町)

いわじゅく
・岩宿遺跡
(群馬県笠懸町)
すずき
・鈴木遺跡
(東京都小平市)

旧石器時代 (中 期)

旧石器時代 (後 期)

- 竪穴住居に住み始める
- 土偶が作られる

■ 約10000年前

縄文時代 (草創期)

おおやじどうけつ
大谷寺洞穴遺跡
(宇都宮市)
のざわ
野沢遺跡
(宇都宮市)
とや
登谷遺跡
(茂木町)

さくらまち
・桜町遺跡(～晩期)
(富山県小矢部市)

縄文時代 (早 期)

せいりょうじとうどう
清陵高校遺跡
(宇都宮市)

うえのはら
・上野原遺跡
(鹿児島県国分市)

縄文時代 (前 期)

ねこやだい
根古谷台遺跡
(宇都宮市)

とりはまかいづか
・鳥浜貝塚
(福井県三方市)
さんないまるやま
・三内丸山遺跡(～中期)
(青森県青森市)

縄文時代 (中 期)

つきのきざわ
梶沢遺跡
(西那須野町)
おじろだ
御城田遺跡
(宇都宮市)

こしょの
・御所野遺跡
(岩手県一戸町)

縄文時代 (後 期)

くらのりかし
寺野東遺跡
(小山市)
のざわいづか
野沢石塚遺跡
(宇都宮市)

おおゆかんじょうれっせき
・大湯環状列石
(秋田県鹿角市)

縄文時代 (晩 期)

かめがおか
・龜ヶ岡遺跡
(青森県木造町)

- 稻作が始まる

■ 約2300年前

- 金属器の使用が始まる

弥生時代 (前 期)

よしのがり
・吉野ヶ里遺跡(～後期)
(佐賀県神崎町・三田川町)

弥生時代 (中 期)

かたのりかし
出流原遺跡
(佐野市)

弥生時代 (後 期)

かたのりかし
殿山遺跡
(上三川町)

古墳時代
奈良時代
平安時代
・
・
・

現 代

今号より旧石器時代から古代(奈良・平安時代)にかけての衣・食・住に関する歴史を、5回にわたりご紹介します。

代の衣食住

季塙

県内初となる 赤土への調査

一九四九年（昭和二十四年）九月、我が国で初めて赤土への調査が実施された群馬県笠懸町岩宿遺跡にて、約二年、真岡市磯山遺跡にて、と約二年、真岡市磯山遺跡にて、内初となる学術的調査が開始された。調査担当者は岩宿遺跡発掘調査団の員でもあった東北大学生岸沢長介先生で、この調査を契機として、矢継ぎ早に栃木市星野遺跡、足利市大久保遺跡、そして栃木市向山遺跡の調査に着手することになる。

葛生町周辺は化石骨の宝庫

一九五一年（昭和十六年）五月、葛生原人として著名な葛生町山菅洞窟出土の古人類化石骨の発見は、足利市立第一中学校に通う秋葉俊彦、長谷川昇及び松村建君たちによるものであるが、これより以前から葛生町周辺の石灰岩地帯に眠る化石骨の発見に奔走した方々がいる。清水屋一郎、中澤保の両名である。

奇しくも二人は、岩宿の発掘と相前後する頃から葛生町周辺の石灰岩採掘地や洞窟の調査を開始しており、

化石骨の発見地は八十箇所を超えて、多量に出土した化石骨の中にはナウマン象やトウヨウ象を含む八十四種類もの動物化石のほか、数種の植物化石も発見しており、当時の気候や生態系を知る上で極めて重要な手かりとなっている。さらに興味がそぞれる点は、幾つかの洞窟で、石器や骨角器などの出土も報告されており、もし人類化石骨と石器の同時存在が証明されるならば日本初の発見となる。

組み合わせ道具の出現へ

鹿沼市坂田北遺跡や小山市寺野東遺跡からは、チャートや黒曜石を用いた円錐形の小さな石器が幾つか出土し

ている。これは細石核と呼ばれ、カミソリの刃のような細石刃を剥がした残りかけである。

約一万五千年前の頃、旧石器時代も終わりに近づくと、これまで主要な道具であったナイフ形石器や槍先形尖頭器に代わって、大陸からたらされた細石刃による「組み合わせ道具」が日本列島の全体に一気に広がっていく。

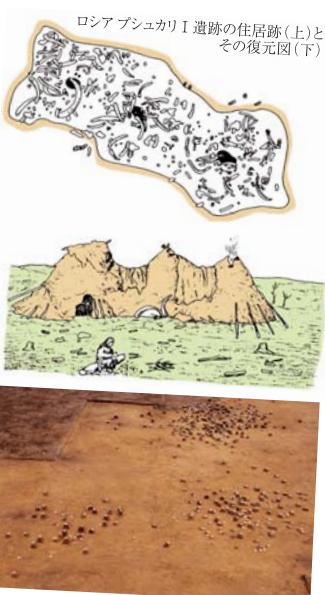
細石刃は幅がセンチに満たない小型な石器であるが、骨や木などの柄の側部に駆られた溝に連続的に埋め込まれた細石刃による「組み合わせ道具」がことによって、目的に応じた刃の長さを設定することが容易である。また、たとえ破損や脱落があっても、その箇所だけに新たな細石刃をはめ込むことによってすぐさま再生が可能となる。



当時の村を探る

通常、この時代の遺跡では、ブロックと呼ばれる石器や石器を作るための石屑がまとめて出土する箇所や、調理した跡と考えられる礫群中には火を焚いた炉が発見されることもある。小山市八幡根東遺跡や上三川町だつたのである。

多功南原遺跡からは、石器が出土しておらず、このブロックを一つの生活跡と考えることも可能である。当時の有機物が残ることはめったに無いので、家の構造を明らかにすることは非常に難しいが、おそらく円錐状の簡単なテントのようなものだつたのである。



いろいろな石材（多功南原遺跡）

多功南原遺跡出土の石器は、黒、赤、灰、薄茶色など、さまざまな色合いで見せる。黒色を代表する黒曜石は、長野県和田峠と岐阜市高原山から、薄茶色の石は珪質頁岩といつて東北の日本海側からもたらされたことから既に二万年も前には広範囲におよぶ不特定ワークが発達していたのである。

多功南原遺跡出土の石器は、黒、赤、灰、薄茶色など、さまざまな色合いで見せる。黒色を代表する黒曜石は、長野県和田峠と岐阜市高原山から、薄茶色の石は珪質頁岩といつて東北の日本海側からもたらされたことから既に二万年も前には広範囲におよぶ不特定ワークが発達していたのである。

多功南原遺跡からは、石器の開拓に力を入れる。

アクリークは、大手通販システム会社

アクリークは、大手通販システム会社</p

2003年 発掘現場 レポート

当センターが発掘調査している現場から、最新の情報をご紹介します。
発掘現場を見かけたらどうぞ声をかけてくださいね。

- 3
- 1
- 2
- 4
- 5

遺跡には
ロマンがいっぱい
つまっています



1

赤坂道上北遺跡(芳賀郡芳賀町祖母井地内)

この遺跡は、昨年度に発掘調査を行い、本年度は埋蔵文化財センターで報告書作成作業を行っています。

写真は調査で発見された主な遺物をまとめて撮ったものです。この遺跡のはじまりを示すのは、左端の土器のすぐ前にある三角錐状石器や礫器です。これらは、撲糸文系土器が用いられた今から8,000年くらい前、縄文早期前半のものです。そのほかは、遺跡に竪穴住居や貯蔵穴がつくられ、ムラが形成された今から4,000年前ころの縄文中期後半の遺物です。前列右が石鏃と搔削器、同中央がミニチュア土器、同左が土製円盤、中央が直立した石棒で、その左下が小型磨製石斧と打製石斧、右が磨石と石皿です。後方には大きな蜂の巣石と縄文土器が並んでいます。深鉢の底部が欠けているものが多く残念です。これらは、縄文社会が最盛期を迎えるころの道具の組み合わせをよく示しています。



2

たかばやし い せき

高林遺跡(芳賀郡市貝町上根地内)

高林遺跡は小貝川の支流である大川のほとりにあります。今年度の10月から、平成13年度に調査した範囲の東側を調査しています。現在のところ、古墳時代後期(6~7世紀)から奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等を確認しています。大川を東方にのぞむ緩傾斜地のため住みやすかったのでしょうか。多いところでは10軒近くの家の跡が重なって発見されました。竪穴住居跡からは土師器や須恵器などの土器、糸紡ぎの道具なども出土していますが、移住したときに道具を持って行ってしまったのか、全体に土器の出土量が少ないようです。



発掘した住居跡

周囲には、彦七新田遺跡や市貝町で調査している寺平遺跡などが所在します。本遺跡(3月まで調査の予定)や周囲の遺跡の調査によって、古代芳賀郡の歴史の一端が明らかになるでしょう。

3

つかはら こ ふんぐん

塚原古墳群 (河内郡河内町塚原地内)

塚原古墳群では、現地での発掘作業は昨年度で終わり、今年度は、埋蔵文化財センターで、調査の成果を報告書に編集しています。

現在、本文執筆と併行して、図面を修正して清書したり、錆びてボロボロになっていた刀や馬具などを修復する作業を行っています。写真の馬具は1号墳から出土した「雲珠(うしづ)（大きいもの）」と「辻金具(つじかなぐ)（小さく、2個で一対のもの）」です。それらは飾り金具の一種で、鞍や手綱を馬に装着させる時の皮ベルトに取り付けられていました。出土した時は、錆びに覆われていましたが、これを慎重に落としてみると、かなりの範囲に金メッキが残っていました。また、全体の保存状態もよく、およそ1,400年前に馬を飾っていた時の姿がよみがえってきました。この古墳の築かれた年代や、どのような人が葬られていたのかを考える上で、重要な資料になります。



4

なかじまささづか いせきろくく

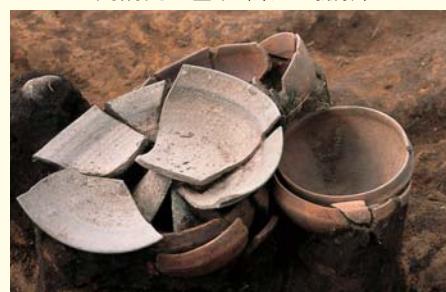
中島笹塚遺跡6区 (宇都宮市砂田町地内)

この遺跡は、北関東自動車道宇都宮・上三川インターの北側にあります。古墳時代中期～後期の古墳が多い遺跡で、発掘調査はこれまでに5回行っています。今回の調査は、墳丘(土を盛った高い部分)が現在でも残っている古墳2基を発掘するために始めました。ところが調査を進めていくと、2基の古墳の周囲から墳丘を失った古墳がたくさん発見されたため、結局古墳は合計6基になりました。古墳はすべて周溝(まわりに掘られた溝)を持ち、形は円形と見られますが、直径は12～24mと大きさはさまざまです。

写真は周溝内に人が埋葬された痕跡が見つかった例です。古墳は直径12mほどの小さな円墳で、周溝内に楕円形の深い穴を掘って埋葬しているようです。穴の北寄りでは赤い土と土器が、南寄りでは鉄鏃が出土しました。土器や鉄鏃は死者に添えられたもの、赤い土は遺体の上にまいた赤い顔料が残ったものと見られます。



周溝内の墓坑(東から撮影)



死者に添えられた土器

5

まがった いせき

曲田遺跡 (芳賀郡二宮町高田地内)

曲田遺跡は小貝川の近くにある古墳時代中期のムラです。調査区からは竪穴住居跡や溝跡などが見つかっています。写真は溝跡のひとつで、埋まつた土の中からたくさんの土器や石製模造品(お祀りに使う道具)が出土しています。そこで少し考えてみました。溝が使われなくなった時に、溝を埋め戻して最後に土器を溝に放りいれ、なんらかの「おまじない」をおこなった可能性があるのではないかと思われます。



埴輪復元

琴平塚6号墳出土埴輪

琴平塚古墳群

琴平塚6号墳は、宇都宮市平塚町に所在した14基の古墳のうちのひとつで、直径17.4mの円墳です。古墳の裾から発見された6点の埴輪の地点を線で結ぶと、直径12.8mの円形となります。しかし、周溝内から発見された埴輪の量の多さから、裾だけでなく墳丘の上にも埴輪が立て並べられていたと推定できます。

このくらいの大きさの古墳でこれだけ多数の埴輪が発見された例は、栃木県ではありません。特に両足までかたどった武人形埴輪は、大きな古墳からしか発見されないので、その意味を考えていく必要があります。人物埴輪はすべて南西側の周溝内から出土しました。近くからは馬形埴輪の破片も発見されており、何らかの情景を表現していたものと考えられます。興味深いことに、埴輪の粘土の成分を分析したところ、筑波山周辺の岩石が混ぜられていることが分かりました。

のことから、埴輪の製作がそれぞれの地域社会を結びつけていたことが想定できます。 中村享史(報告書担当者)



解体後の主な破片(樹脂塗布前)

破片点数287点、写真枚数では8枚。但し、復元に使用する破片は極一部。

復元に使用したエポキシ樹脂

- ハイスーパー5分型…ゲル状の樹脂。形状を作るのに使用。
- X N 1 2 6 4…粘土状の樹脂。
ハイスーパーの上に盛り上げて表面を作るのに使用。



彩色前女子埴輪(髪の部分は推定で復元してあります)

埴輪復元製作

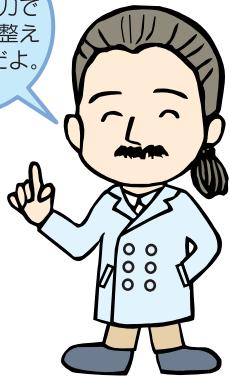
まず、復元するに当たって破片の強化処理(やまかいどう31号参照)を行います。左下の写真的破片1点1点に樹脂を塗布します。強化処理が終った後、接合(セメダイン等で接着)して破片が無いところを復元していきます。

埴輪は重量がありますので、復元に使用する樹脂は収縮・変形に強い2種類のエポキシ樹脂を使います。

通常は下部から順番に復元、整形していく、飾り(紐・刀等)を最後に作っていますが、今回は上部から作成して下部の形状を確認したり、刀を先に作り、腕部の長さ・向き等を決定しました。また後から一部の破片を復元した部分に組み込んだために形状が変わり、新たに復元し直すこともあります。報告書担当者と何度も検討し直しながら作成していくという難しいところもありました。

薄く伸ばせる
樹脂で大体の
形状を作つてから、
粘土状の樹脂で
表面を製作して
いくんだ。

そして
最後に彫刻刀で
削つて形を整え
ていくんだよ。



①脚部・甲(草摺)復元

右脚は股部分まで残っていて復元し易かったのですが、左脚は股部と膝下しか残つていなかつたため、太腿部を作つてから復元しました。

草摺は前部から右腰部にかけて残つておらず、それを元に復元しました。また、草摺の模様が入つた破片を左腰部に組み込みました。



②胴部・大刀等復元

右前部しか残つていない上、腰部との接合部が無いために胴下部を少し復元してから右前胴部を接合しました。その後、前腕部破片と大刀残片の大体の位置を決めて肩部まで作つていきました。



③腕部及び背復元

左腕は前腕部破片を接合して、上腕部を作つていきました。頭部は背を先に作り、そこに美豆良を差し込んで残つた部分を顔の大きさとしました。

*1 甲胄(かつちゆう)…甲はよろい。胄はかぶと。

甲(鎧)…短甲、挂甲の二形式に分かれる。この埴輪は挂甲です。

胄(兜)…古墳時代には衝角(しようかく)付冑と眉庇(まびさし)付冑が発達しました。

この埴輪は衝角付です。

*2 草摺(くさづり)…甲の一部。甲の胸から下に別れて垂れている裾。

*3 美豆良(みずら)…古墳時代の男子の髪型の一つ。髪を左右に分け、耳辺りで結つて下げたもの。

「那須野が原博物館」開館へ向けて

施設紹介

西那須野町は、本年4月に那須野が原博物館をオープンします。

那須野が原博物館は、那須野が原の開拓を中心に、歴史・民俗・考古・美術・自然分野を対象とする総合的な博物館を目指します。

常設展示においては、那須野が原の地形・地質に始まり、棚沢遺跡を紹介し、近代においては那須野が原の開拓・交通を中心として企画展や移動展・テーマ展を開催します。また、一般・子どもを対象とした教室・講座も実施します。

次代を担う子どもたちのために体験型の博物館とともに、地域の遺産を後世に伝え、地域の教育・文化の拠点とし、また情報の発信基地として情報の収集・提供を通じ、世代を超えた交流の場として博物館が機能することを願っています。

こうした機能のもとに、博物館施設としては、常設展示室・企画展示室・特別収蔵庫・一般収蔵庫・屋外収蔵庫を備え、事務室・学芸研究室・修復作業室・備品庫・エントランスホールがあり、学習交流の場としては、インフォメーションルーム・研修室・体験学習室・団体活動室・和室などがあります。建物は鉄筋コンクリート造平屋建で、延べ床面積2038.68m²を有します。

平成5年の郷土資料館焼失を乗り越え、ここに那須野が原博物館が開館いたします。開館の折には、ぜひご来館ください。

〈那須野が原博物館〉

所在地：栃木県那須郡西那須野町三島5-1 Tel.0287-36-0949



※文・写真 那須野が原博物館提供

とちぎテレビ「古代の文化にふれよう」

平成15年11月18日に、とちぎテレビ製作による番組「とちぎ教育新事情」の取材が二宮町市之塚遺跡において行われました。市之塚遺跡では、地元二宮町の中学校生を受け入れての「マイ・チャレンジ推進事業」にも協力しています。「人とのかかわりを主とした社会体験活動を通して、共に生きる心や感謝の心を育む。」という推進事業の趣旨に基づき、発掘現場の作業員さんたちに交じっての発掘調査体験活動を実施しました。

初めのうちは緊張していた生徒たちでしたが、発掘現場担当者の指導のもと徐々に仕事にも慣れていき、発掘作業員さんたちと共に熱心に作業に取り組んでいました。

こうした市之塚遺跡での社会体験活動を通して、生徒のみなさんは、二宮町の古い歴史を知ると同時に、働く喜びと歴史の重みを感じ取ってくれたことと思います。

市之塚遺跡

二宮町の北東部に位置し、南流する小貝川の西岸にあります。南北に細長い台地上に、縄文時代から中世にかけて長い間営まれた大規模な複合遺跡です。住居跡200軒以上、古墳4基、多くの土坑（食料を貯蔵する穴、動物を捕らえる落とし穴、お墓など）が見つかっています。



